

## 日口浮魚・底魚類 (総説)

### 最近一年間の動き

日口間には、北西太平洋の生物資源の保存及び最適利用を考慮し、相互の 200 海里水域で他方の国の漁船が漁業を行うために、1984 年に「日本国政府とソヴィエト社会主義共和国連邦政府との間の両国の地先沖合における漁業の分野の相互の関係に関する協定 (通称：日ソ地先沖合漁業協定)」が締結され、これに基づき日口漁業委員会が設置されている。日口漁業委員会では、日口両国水域に共通に存在する主要な魚種群の持続的利用を協議するため、科学者グループを設置し、それらの資源状態を協議し報告書を作成している。

第 29 回日口漁業委員会の決定に従い、両国科学者は以下の諸活動を行い、日口両国が双方の水域内で利用している同一資源について最新の情報を交換し、資源状態に関する見解をとりまとめた。2013 年 10 月に横浜市において「さんま、まさば、まいわし、かたくちいわし、いか及びすけとうだらの生態学及び現存量に関する意見交換会」を開催し、サンマ、スケトウダラ、イカ類、マイワシ等の研究課題を報告し、議論を行った。2013 年 11 月にウラジオストクにおいて「第 27 回日口漁業専門家・科学者会議」を開催し、資源状況などに関する資料及び意見の交換を行い、資源に関する見解と 2014 年の調査協力計画案を作成した。2013 年 11～12 月にサンクトペテルブルクで開催された「第 30 回日口漁業委員会」において当該調査協力計画案を検討し採択した。さらに同委員会においては、2014 年の「第 31 回日口漁業委員会」までに、イトヒキダラに関する情報交換を行うとともに、マダラに関する情報交換の可能性及びサハリン・北海道系ニシンに関する情報交換の継続の妥当性を検討することが決定された。

### ロシアと我が国漁業の歴史

我が国の北洋漁業、特にロシア沖における漁業として、日露戦争の結果による領土の拡大に伴う漁場の広がりもあり、大正時代には母船式カニ漁業、帆船タラ漁業等が興った (斉藤 1960)。昭和初期には、母船式さけ・ます漁業、トロール漁業を含め発展したが、第 2 次世界大戦によってこれら漁業は大きな影響を受けた。第 2 次世界大戦後、マッカーサーラインによって我が国漁船の漁場は著しく狭められていたが、1952 年に同ラインが撤廃されるとともに、ソ連邦沖公海新漁場の開発が積極的に進められた (北野 1980)。1953 年に北方四島周辺太平洋岸漁場、1956 年にサハリン東岸タライカ湾、1957 年にサハリン西岸タール海峡で調査が行われ、スケトウダラ、ホッケ、カレイ類等の底びき網漁場が開発された (北野 1980)。1956 年には日ソ漁業条約、1969 年には日ソかに取決、1972 年には日ソつぶ取決が結ばれた。我が国漁船のソ連沖での漁獲量としては、1975 年には北海道沖合底びき網が 38.9 万トン、北転船がカムチャッカ半島周辺

で 73.3 万トン等であった (北野 1980)。

一方、ソ連漁業による日本沖での漁獲量は、1975 年にはサバ 13.3 万トン、マイワシ 12.2 万トン、スケトウダラ 13.4 万トン、イトヒキダラ 10.6 万トン等、合計 52.7 万トンであった (北野 1980)。1976 年 12 月にソ連は漁業管理法を制定し、200 海里漁業水域を設定したが、我が国も 1977 年 3 月に同漁業水域を設定した。1977 年には日ソ・ソ日漁業暫定協定、1978 年には日ソ漁業協力協定が結ばれ、相互に相手国 200 海里水域で自国の漁船が操業できるようになった。1978 年にソ連漁業水域内で我が国漁業に与えられた漁獲割当量 (漁獲枠) は、スケトウダラ 34.5 万トン、イカ 14.6 万トン、イカナゴ 6.5 万トン、マダラ 4.5 万トン、サンマ 6.9 万トン等、合計 85 万トンであり、200 海里水域設定以前の漁獲量に比べかなり減少した (北野 1980)。同年の日本漁業水域内におけるソ連漁業への漁獲割当量は、マイワシ・マサバ 31.8 万トン、スケトウダラ 8.0 万トン、イトヒキダラ 13.8 万トン等、合計 65.0 万トンであり、200 海里水域設定以前の漁獲量とそれほど差はなかった (北野 1980)。

相互の相手国 200 海里水域内での割当量の推移として、ロシア水域における我が国漁船に対する漁獲割当量の経年変化を図 1 に示した。1979～1985 年には、割当量は 60～75 万トンの範囲であったが、1986 年には 15 万トンへと大きく減少した。1987 年にはそれまでの無償枠 (相互枠) の他に、日本漁船に対してソ連水域で 10 万トンの有償枠が設けられるようになった。我が国漁業に対する割当量は、1988 年には相互枠と有償枠を含めてスケトウダラ 12.8 万トン、サンマ 6.5 万トン、イカ 7.5 万トン等、合計 31 万トンとなった。1998 年にはスケトウダラ 1.6 万トン、サンマ 3.2 万トン、イカ 4.1 万トン等、合計 10.6 万トンとなり、20 年前の 1978 年の 8 分の 1 となった。我が国漁業に対する割当量は、2005 年以降、5.6～5.8 万トンで推移していた。2014 年は、7.6 万トン (相互入漁 7.1 万トン、有償入漁 0.5 万トン) と前年より 14% 増加した。漁業種類別には、さんま棒受網、遠洋底びき網 (北転船)、いか釣り、沖合底びき網、底はえ縄の順に割当が多い。

日本水域におけるロシア漁船に対する割当量は、1985 年以降我が国漁船に対するロシアからの相互枠と等量で推移しており、1988 年には 21 万トン、1998 年には 9.5 万トンとなったが、2004 年は 5.5 万トンとなり、それ以降は 5.0～6.2 万トンで推移している。魚種としては、1980、1990 年代はマイワシ・マサバが最も多かったが、2001～2012 年にかけてはイトヒキダラが半分以上を占めていた。しかし、2013 年以降サンマの割当量が増加し、2014 年には最大となった。2014 年の割当量はサンマ 3.0 万トン (同 44% 増)、イトヒキダラ 2.8 万トン (前年同)、マイワシ・マサバ 1.3 万トン (前年同) となった。

ロシア水域における我が国の漁獲量の推移を図 2 に示した。

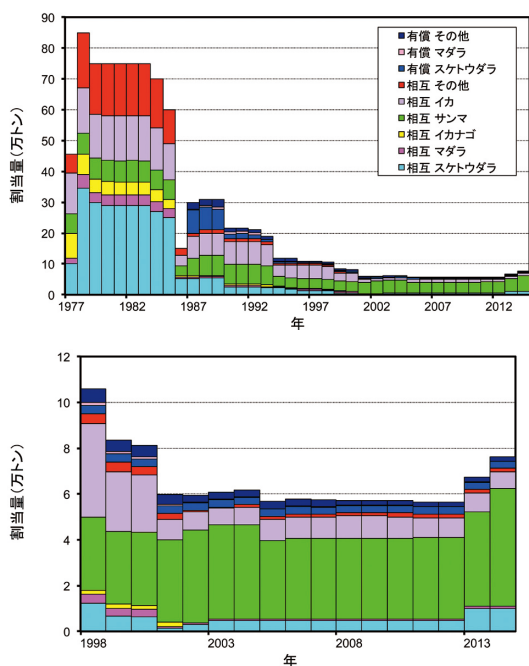


図 1. ロシア水域における我が国漁船に対する漁獲割当量の経年変化 (下は近年の拡大)

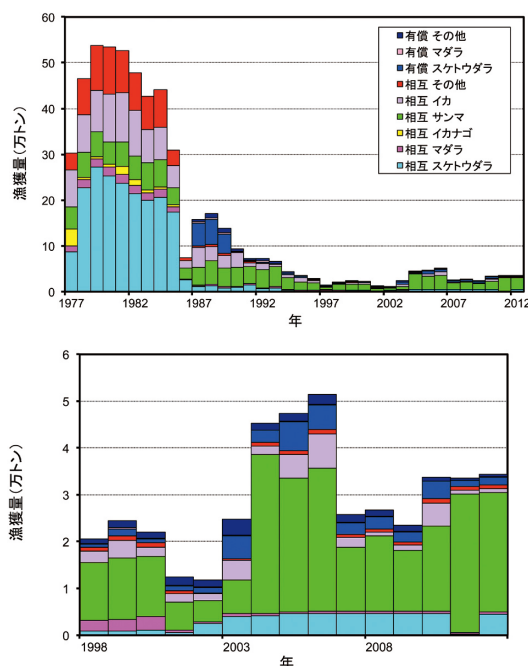


図 2. ロシア水域における我が国漁船の漁獲量の経年変化 (下は近年の拡大)

相互枠と有償枠を合わせて、我が国漁船の漁獲量は 1979 年の約 54 万トンが最も多く、スケトウダラが約 5 割を占めた。漁獲量は、1986 年には約 7 万トンに急減したが、1988 年には約 17 万トンに回復した。その後は直線的に減少し、2002 年には 1.2 万トンとなったが、2004～2006 年には 4.5～5.1 万トンに増加した。2007～2009 年には 2.3～2.7 万トンに半減したが、その後は 3.4 万トンに回復している。1980 年代前半はスケトウダラ、その後はサンマが最も多く漁獲された。割当量に対する漁獲量の割合は、1980 年代は 50～70% であったが、1990 年代には 20～30% 程度に低下した。2004～2006 年には再び 70～90% に上昇したが 2007～2009 年は 50% 以下に低下した。2010 年以降は 60% 近くに回復している。

我が国水域におけるロシア漁船の漁獲量は、1985～1992 年には 5～15 万トンで、マイワシとマサバが大部分を占めたが、1994 年以降ほとんど漁獲されなくなった。最近はいとヒキダラのみが漁獲されていたが、2010 年以降はサンマも漁獲されている。2000 年以降のロシア漁船による漁獲量は、2.4～2.7 万トンで推移していたが、2008 年以降 2 万トンを割っている。2011 年は震災によるロシア側の操業自粛により入域が遅れ、漁獲量は 1.2 万トンと前年の 3 分の 2 に減少したが、2012 年には 1.6 万トンと震災前の水準に戻った。

なお、日本漁船は、日ソ地先沖合漁業協定の他に日ソ漁業協力協定、北方四島周辺水域操業枠組協定及び貝殻島昆布協定(民間)に基づく操業も行っている。

### 日口両国水域にまたがって存在する資源に関する資源評価

2013 年の日口漁業専門家・科学者会議において、日口両国が双方の水域内で利用している同一資源の状況に関して、

両国の科学者は、以下の通り共通の見解を持った。スケトウダラ、サンマ、スルメイカ等については、ロシア水域での分布や資源状態に関する情報が、それらの適切な資源評価及び評価結果を踏まえた資源管理のために重要であり、引き続き日口科学者による意見交換会等の機会に、これらの情報収集に一層努める必要がある。

- (1) サンマ：現在サンマの資源は充分高位にあり、資源に与える漁業の影響は小さいものの、資源の年別変動が大きいため、今後の資源動向には注意を要する。
- (2) マイワシ：太平洋のマイワシ資源は 1980 年代に比べて低水準にあるが、近年、その明瞭な増加傾向が認められている。対馬系群マイワシ資源の明瞭な増加が認められるものの、その水準はいまだに 1980 年代に比して低位にあり、今後の状況を注視し、漁獲管理することが必要である。
- (3) マサバ：2000 年代前半の最低水準は脱し増加中である。
- (4) カタクチイワシ：カタクチイワシの資源は十分操業可能な中位にある。
- (5) スルメイカ：日本海における分布の北偏化、及び近年の資源量の減少傾向が指摘されるものの、太平洋と日本海におけるスルメイカの資源量は過去数十年間比較的高位にある。
- (6) ニシン：サハリン・北海道系ニシンの資源は、何らの増加傾向も見られない極めて低水準にある。
- (7) スケトウダラ：北部日本海系群のスケトウダラ資源は 1990 年以降低水準にある。

### ロシアからの割り当てに関係するその他の重要資源に関する情報

マダラ、キチジ等の重要資源に関して、ロシアから入手可能な情報は少ない。ロシアは、これら魚種についても資源調査を基に TAC を設定しているため、当該 TAC は基本的に

資源動向を反映していると考えられる。ここでは、我が国漁船が操業している水域の主な魚種に関して、ロシアが設定した極東水域の TAC 数量を記載する (表 1)。

表 1. ロシアによる極東水域の TAC 数量 (トン) の推移

魚種名	2013年	2014年
スケトウダラ	617,900	618,600
マダラ	46,200	57,300
コマイ	7,700	2,700
ホッケ類	47,200	54,200
メヌケ類	4,738	4,788
キチジ	515	333
カレイ類	8,835	6,000
タコ類	240	240
ニシン	8,600	6,000

## 執筆者

北西太平洋ユニット

北海道区水産研究所 資源管理部

八吹 圭三

## 参考文献

北野 裕. 1980. 北海道海域底魚資源. *In* 青山恒雄 (編), 底魚資源. 恒星社厚生閣, 東京. 204-228 pp.

斉藤市郎. 1960. 遠洋漁業. 恒星社厚生閣, 東京. 318 pp